



MITUISIYAKATA (KITAMURA) SITE  
**三井氏館跡（北村遺跡）**

概 報

1995

山梨県長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

山梨県長坂町

# 三井氏館跡(北村遺跡)

県営広域営農団地農道整備事業とともに第1次発掘調査概報

1995. 3

長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所

# 序

長坂町は広大な八ヶ岳南麓のほぼ中央に位置し、自然に恵まれた高原の町です。豊かな自然に抱かれて町内には古くは縄文時代草創期から的人類の活動痕跡が認められ、遺跡が高密度に分布していることが知られています。

この度、山梨県営広域営農団地農道整備事業の建設にともない、平成6年度に三井氏館跡（北村遺跡）の発掘調査を長坂町教育委員会が実施し、八ヶ岳山麓地方ではこれまで事例のなかった占墳時代初頭の方形周溝墓群が確認されました。しかも全国的にも類例の少ない墳丘盛り土が良好に遺存しているものも含まれています。

これまで長坂町をはじめ周辺の八ヶ岳南麓地方においては、国家形成期ともいわれる3世紀から4世紀にかけての歴史資料が非常に少なく、その歴史の動態は全く不明であったわけですが、今回の調査によりその歴史解明が大きく前進するものと思われます。その意味から、とりあえず概報という体裁ではございますが、ひろく資料を公開し皆様のご意見を拝聴することにより、今後の整理作業に大いに活用していきたいと存じます。

最後に、調査にあたりご指導、ご協力をいただいた関係機関、調査をささえて下さった地域住民の皆様に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

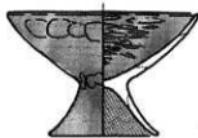
長坂町教育委員会

教育長 小松 清寿



## 例　　言

- 1 本書は山梨県北巨摩郡長坂町長坂下条字北村に所在する三井氏館跡（北村遺跡）<sup>1)</sup>の第1次発掘調査概報である。
- 2 発掘調査は山梨県営広域営農団地農道事業にともない、峡北土地改良事務所からの委託を受け長坂町教育委員会が実施した。
- 3 本書の編集は小宮山隆（長坂町教育委員会文化財担当）が行った。
- 4 本書作成に関わる業務は小宮山と吉田光雄（同遺跡調査補助員）の総括のもと、石川昭江、小林貴子、清水純代、日向登茂子（同遺跡整理員）が行った。
- 5 発掘調査、遺物等の整理及び報告書の作成にあたり以下の方々の御指導をいただいた。心より謝意を表します（順不同・敬省略）。  
立花 実、田尾誠敏、山岸良二、中山誠二、田中 裕、日高 慎、田代 孝、  
小野正文、保坂康夫、前田 潤、北巨摩市町村文化財担当者会
- 6 出土品及び図面・写真は長坂町教育委員会が保管している。
- 7 遺物図版トーン部分は赤色塗彩を示す。



## 註

- 1) 開発工区は、周知の埋蔵文化財として町教育委員会が定める「三井氏館跡」及び「北村遺跡」の両遺跡を通過する。当初、現地踏査において前者「三井氏館跡」において中世造構の存在の可能性が強く、「北村」遺跡地内では斜面地形であることから造構存在の可能性が薄かったので、峡北土地改良事務所との負担協定書等には「三井氏館跡」の名称を用いていたが、本調査段階で、中世の館に関連するような造構・遺物が検出されなかったこと、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての造構・遺物が圧倒的多数であることから、現地や室内作業、現地見学会等においては「北村遺跡」という名称を用いた。本書でも以下「北村遺跡」として記述する。

# Contents

## もくじ

## 本文

序	3
例言	5
第1章 調査に至るまで	10
第1節 調査の経過	10
第2節 遺跡の概要	10
第3節 基本層序	11
第2章 遺跡の環境	12
第3章 遺構と遺物	16
第1節 1号方形周溝墓	16
第2節 2号方形周溝墓	16
第3節 出土遺物	28
おわりに	36
写真図版	37
参考文献	43

## 挿図

図1	基本層序	11
図2	長坂町の遺跡分布（縄文時代～古墳時代）	13
図3	北村遺跡周辺の地形ならびに遺跡分布	15
図4	北村方形周溝墓群および測量図	17
図5	1号方形周溝墓調査前地形図	19
図6	セクションポイント配置図	20
図7	セクション（O-A-A'）	21
図8	セクション（B-B'）	21
図9	セクション（O-C-C'）	23
図10	セクション（D-D'）	23
図11	セクション（O-E-E'）	23
図12	セクション（F-F'）	25
図13	セクション（O-G-G'）	25
図14	セクション（H-H'）	25
図15	1号方形周溝墓主体部層序	27
図16	1、2号方形周溝墓主要遺物出土位置	28
図17	出土遺物（1、2）	29
図18	出土遺物（3、4）	30
図19	出土遺物（5、6、7、8）	31
図20	出土遺物（9、10）	32
図21	出土遺物（11）	33
図22	1号方形周溝墓墳頂土器出土状況	33
図23	出土遺物（12、13）	34
図24	出土遺物（14、15）	35

## 写真図版

図版 1	北村遺跡 1号方形周溝墓全景	37
図版 2	1号方形周溝墓墳頂部遺物出土状況	37
図版 3	2号方形周溝墓遺物出土状況（周溝内）	38
図版 4	1号方形周溝墓墳頂部出土土器	38
図版 5	出土遺物 1	39
図版 6	出土遺物 2	39
図版 7	出土遺物 3	40
図版 8	出土遺物 4	40
図版 9	出土遺物 5	41
図版10	出土遺物 6	41
図版11	出土遺物 7	42
図版12	出土遺物 8	42
図版13	出土遺物 9	43
図版14	出土遺物10	43



北村遺跡 1号方形周溝墓全景（南東方向より撮影）

# 第1章 調査に至るまで

## 第1節 調査の経過

八ヶ岳南麓を縦横断する山梨県営広域農道整備事業が、長坂町の下条地内を通過することが提示され、それに伴い長坂町教育委員会によって埋蔵文化財有無の確認調査を行ったのは1993（平成5）年度である。

確認調査は稚木材のなか困難を極めたが、 $2 \times 2\text{ m}$ の平方グリッドを任意に設定し試掘を行い、溝状の落ち込みを数か所のグリッドで確認した。町教育委員会は工事発注者である山梨県駒込土地改良事務所と協議を行い、1994年の10月から発掘調査を開始した。当年度の発掘調査は1月を以て中断し、残りの調査分は1995年度に行うことになった。

## 第2節 遺跡の概要

北村遺跡からは6基の方形周溝墓が確認された。当年度の調査ではそのうち2基の方形周溝墓（内1基は未完掘）を発掘調査し、他の4基については範囲確認にとどまっている。これら方形周溝墓からの出土遺物は整理途上ではあるが、概ね4世紀前半と考えられ、築造年代もこれに近いものと推測される。また、1号方形周溝墓としたものは墳丘状の盛り土が良好に遺っており、その墳頂部からは供獻品とも思われる高杯や盞などからなるほぼ完形の土器数個体が出土し、山梨県地域ではこれまで発見例のなかった方形周溝墓の全体構造を知るための重要な資料として注目されている。

当概報においては、発掘調査期間が長引いたこともあり遺物や図面等の整理が完了しておらず、1号方形周溝墓の概況をおもに報告するにとどめざるを得ない。

### 第3節 基本層序(図1)

層序は大まかに表土層および方形周溝墓方台部填丘構成をI層、方形周溝墓築造時旧地表面および方形周溝墓周溝内覆土である黒色土をII層、周溝への崩落土をIII層、周溝壁部崩落土をIV層、周溝底部のブロック状の黄褐色ローム土をV層、地山となる黄褐色ローム層をVI層とした。V層は周溝の壁および底部の調整に用いられた可能性がある。周溝内の土器類出土層位はII～III層に限られる。

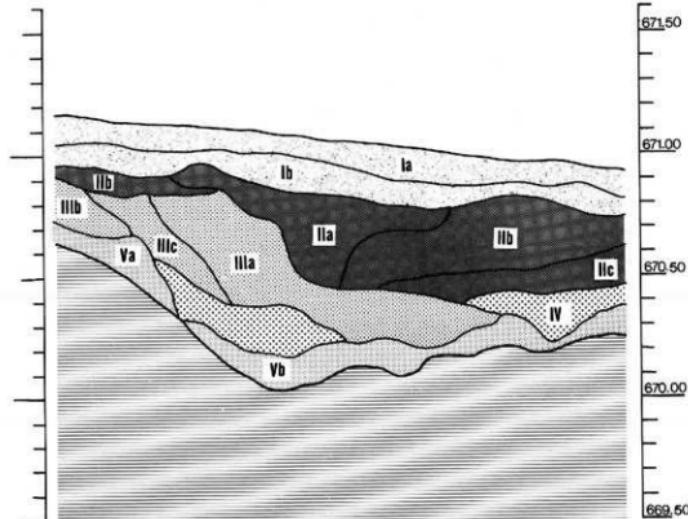


図1 基本層序

- I a 暗褐色土、粒子不均密、しまりなし
- I b I a よりやや明るい褐色土、粒子不均密、しまりなし
- I c 黄褐色土、黄褐色土(ローム)粒子を多量に含む、粒子不均密、しまりなし
- II a 黒色土、わずかに黄褐色土粒子を含む、粒子均密、しまりなし
- II b II a よりやや明るい暗褐色土、わずかに黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりなし
- II c 褐色土、わずかに炭化物を含む、粒子不均密、ややしまりあり
- III a 暗褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりあり
- III b III a より明るい褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子均密、しまりあり
- III c III a より明るい褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりあり
- IV 暗褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子均密、しまりあり
- V a 黄褐色土、粒子不均密、しまりなし
- V b 黄褐色土、径3～8cmの黄褐色土ブロックを多量に含む、しまりなし
- VI 黄褐色土、粒子均密、しまりあり

## 第2章 遺跡の環境

北村遺跡は、新生代第三紀末の南八ヶ岳爆発噴火による八ヶ岳火砕流によって形成された長坂台地に立地する。遺跡周辺は北西から南東に延びる舌状台地に両側から浅谷が迫り、痩せ尾根地形になっている。遺跡地の標高はおよそ671mであり浅谷への比高はおよそ5mを計る。遺跡地周辺の浅谷は現在こそ農業用貯水池によって水田に利用されているが、貯水池の造られる以前は農業用水の確保に苦労した地域であり、湧水の乏しい高燥な台地帯になっている。

この地域の古地上やその斜面には縄文時代から古代中世に至るまでの数多くの遺跡が立地している(図2)。1940年、大山柏らによって山梨県下で最初の本格的な学術発掘といえる調査が行われ、縄文時代後晩期の集石遺構や耳飾などが出土した長坂上条遺跡は北村遺跡の北約1kmに(大山ほか1941)、1991~1992年にかけて町教育委員会によって古墳時代の集落跡が確認された龍角遺跡は東0.7kmに所在する。また周囲1km内外には縄文時代中期の大規模集落が予想される酒呑場遺跡や池平遺跡、新居遺跡などが北村遺跡と同様の台地上に立地し、中世甲斐を治めた武田氏の重臣長坂氏の屋敷跡と伝えられる通称「長閑山」は北村遺跡北東0.8kmに位置するなど遺跡の多様性に富んでいる。しかし、これまで開発の及んでいない広大な森林部分では遺跡の有無すら確認することが困難であり、かなり多くの遺跡が未確認の状態であることが予想される。

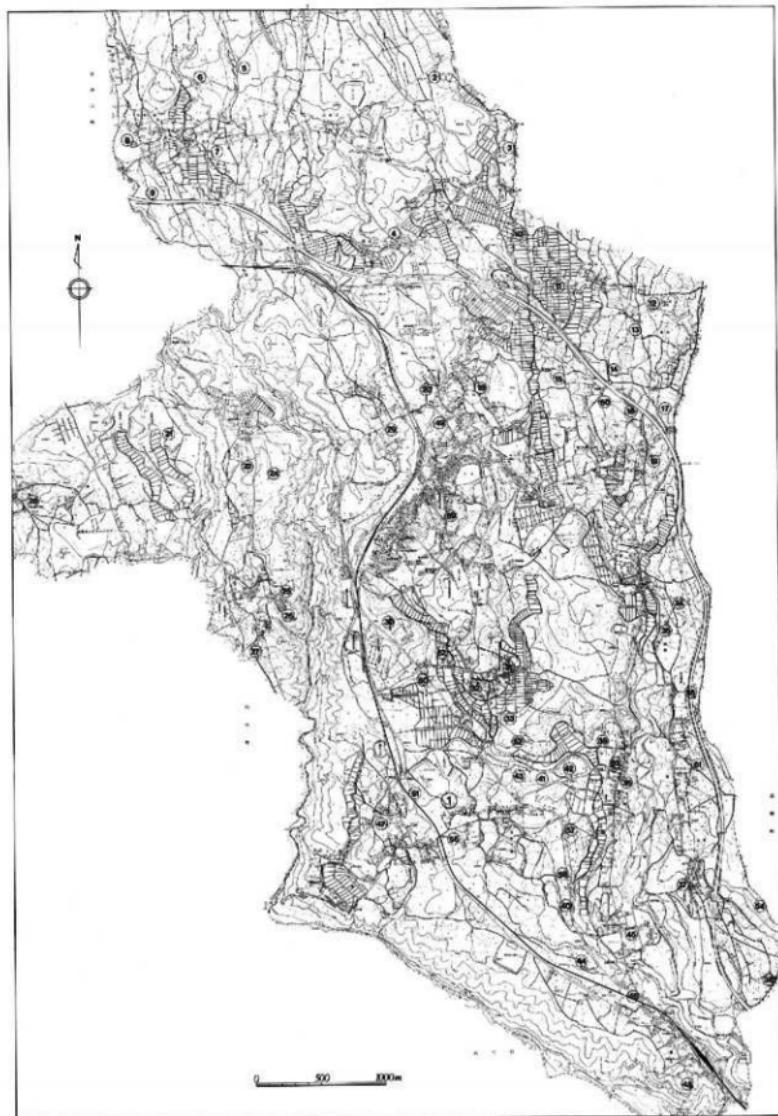
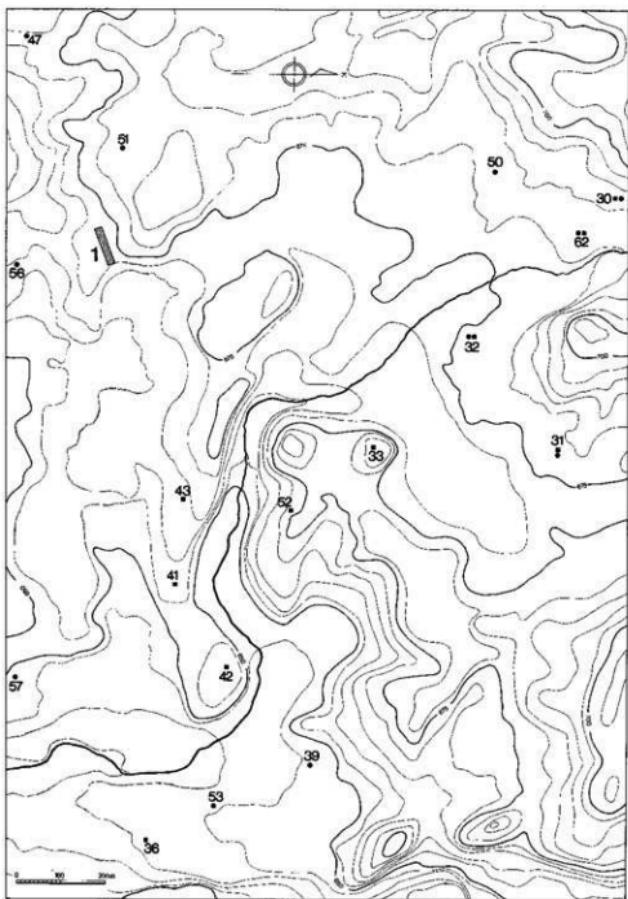


図2 長坂町の遺跡分布（縄文時代～古墳時代）

表1 長坂町の縄文から古墳時代にかけての遺跡一覧

1 三井氏館跡（北村遺跡）	46 二ツ墓古墳（古墳）
2 稲屋敷遺跡（縄文時代中期、弥生時代）	47 池平遺跡（縄文時代中期）
3 神之原遺跡（縄文時代中期）	48 上口野原遺跡（縄文時代中期）
4 十郎林遺跡（縄文時代中期）	49 大林遺跡（縄文時代中期）
5 夫婦岩遺跡（縄文時代後期／晚期）	50 長坂上条遺跡（縄文時代中期／後期／晚期）
6 横山遺跡（縄文時代中期／後期）	51 北村北邊跡（縄文時代中期）
7 横山平遺跡（縄文時代中期／後期）	52 和田遺跡（古墳時代）
8 上ノノリ平北遺跡（縄文時代中期）	53 渋沢上町遺跡（縄文時代中期）
9 上ノノリ平南遺跡（縄文時代中期）	54 泥里遺跡（縄文時代中期／後期）
10 別当西遺跡（縄文時代後期）	55 須無遺跡（縄文時代中期）
11 小和田遺跡（縄文時代中期）	56 新居遺跡（縄文時代中期）
12 塚田遺跡（古墳時代）	57 山本遺跡（縄文時代中期）
13 蓬田遺跡（縄文時代中期、古墳時代）	58 下星敷北遺跡（縄文時代中期）
14 柳新居遺跡（縄文時代中期、古墳時代）	59 上河内遺跡（縄文時代中期）
15 小星敷遺跡（縄文時代中期）	60 御坪北遺跡（縄文時代早期／前期／中期、 弥生時代）
16 柳坪遺跡（縄文時代中期、弥生時代、古墳時代）	61 新田遺跡（縄文時代中期）
17 塚原遺跡（弥生時代）	62 湯谷場東遺跡（縄文時代中期、弥生時代）
18 成岡遺跡（縄文時代中期、弥生時代）	
19 石原田北遺跡（縄文時代後期）	
20 房屋敷遺跡（縄文時代前期／中期）	
21 東熊遺跡（縄文時代前期／中期）	
22 岩の原遺跡（縄文時代前期／中期）	
23 西糸南遺跡（縄文時代中期）	
24 雄塚村遺跡（縄文時代前期／中期／後期）	
25 堂久保遺跡（縄文時代中期）	
26 城山上遺跡（縄文時代中期）	
27 戸久保遺跡（縄文時代中期）	
28 佐平遺跡（縄文時代中期）	
29 高松遺跡（縄文時代中期／後期）	
30 湯谷場遺跡（縄文時代早期／前期／中期、 弥生時代）	
31 東村遺跡（縄文時代中期、古墳時代）	
32 西村遺跡（縄文時代中期、古墳時代）	
33 長坂氏屋敷跡（古墳時代）	
34 大々神遺跡（古墳時代）	
35 横木遺跡（弥生時代、古墳時代）	
36 原町北遺跡（古墳時代）	
37 宮久保遺跡（縄文時代中期）	
38 競馬場遺跡（縄文時代中期／後期／後期）	
39 大久保遺跡（縄文時代中期／後期）	
40 下尾敷遺跡（縄文時代中期）	
41 龍角遺跡（古墳時代）	
42 西原敷遺跡（古墳時代）	
43 龍角西遺跡（古墳時代）	
44 清水頭遺跡（縄文時代後期、古墳時代）	
45 農業高校前遺跡（縄文時代中期）	



●弥生時代 ■古墳時代

図3 北村遺跡周辺の地形ならびに遺跡分布

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 1号方形周溝墓（図4）

調査区のなかでは最も東側に位置する。周溝の外縁では長軸が約17.0m、短軸が約14.0mの方形周溝墓である。方台部は長軸約11.0m、短軸約10.0m（陸橋部分も含めて）、周溝底部から方台部墳頂までは1.6～1.8mの比高がある。方台部墳頂から西北西の方向に約2.0m幅の陸橋が存在する。また方台部墳頂から南の周溝底部も幅0.3mほどにわたって両側の周溝底部よりいずれも0.4～0.5mほど浅い部分が認められた。方台部墳頂は周溝確認面からおよそ0.9～1.0mを測る。陸橋部から方台部墳頂に向かって右位の周溝は2号方形周溝墓の周溝と重複する。

方台部墳頂表上直下からは合計11個体以上の土器がまとまって出土した（図17～21）。内訳は小型壺3、高环3、小型鉢1（いずれも赤色塗装）、および小型甕が2、壺2（一部）である。

方台部墳頂下にて4.0×1.8mの長方形掘り方のなかに2.5×0.7mの堅穴状施設が確認され（図15）、埋葬施設と推測されるが遺物は全く出土しなかった。層位から推測すると、この堅穴状施設は周溝墓築造当時の地表面下にまで及んでいる。東側長軸の周溝内には焼土ブロックが検出された。これら周溝墓の構造については、未検討の部分が多いために本報告書において改めて詳述したい。方台部墳丘ならびに周溝埋没土の各層位は図7～14のとおりである。

### 第2節 2号方形周溝墓（図4）

1号方形周溝墓の西側に隣接している。2号周溝墓の南側約半分に関しては工区外であるのに加えて樹木が多く存在しているので、充分な調査を行えなかった。周溝の位置を確認し周溝部分のみ調査した。方台部墳丘の構造等については次年度の調査を行ってから改めて報告する。

規模は周溝の外縁では長軸が約14.5m、短軸が約14.0mを測る。方台部は長軸約10.0m、短軸約9.5m（陸橋部分も含めて）、周溝底部から方台部墳頂までは1.0～1.4mの比高がある。1号方形周溝墓と同じく方台部墳頂から西北西の方向に約2.5mの陸橋が存在する。出土遺物は未整理であるが、周溝内からは小型のS字状口縁台付甕や壺型の土器類が出土している。

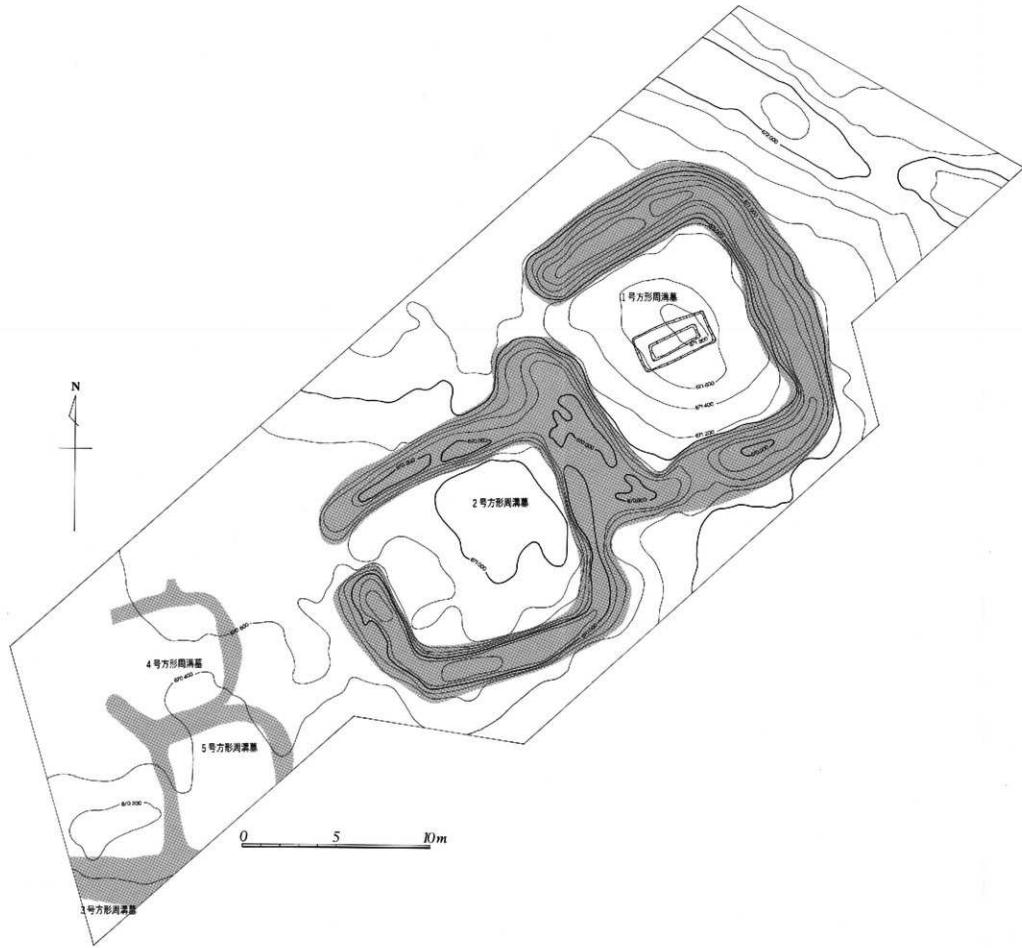


図4 北村方形周溝墓群  
および測量図



図5 1号方形周溝墓調査前地形図（破線は周溝確認面の位置）

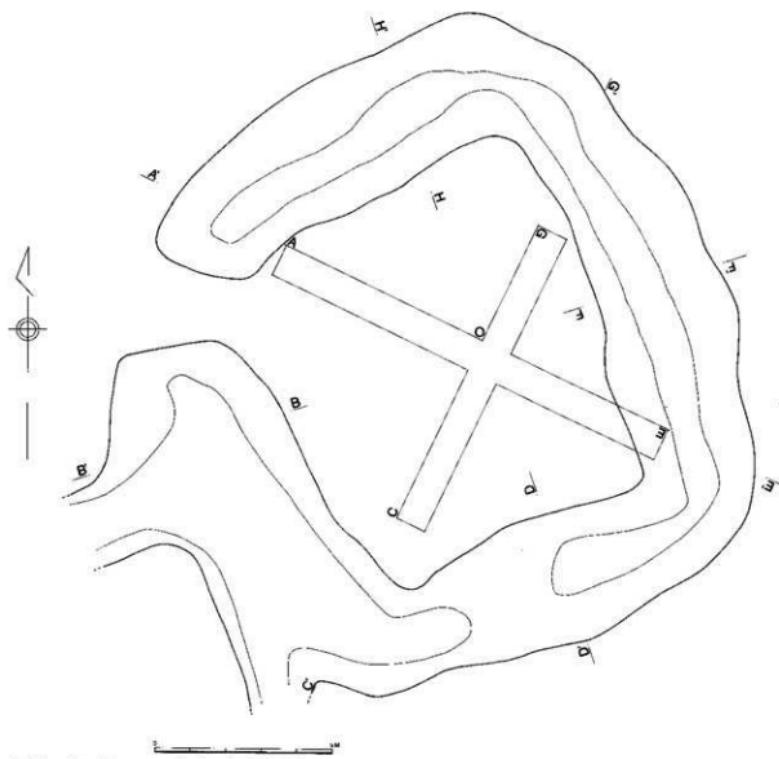


図6 セクションポイント配置図

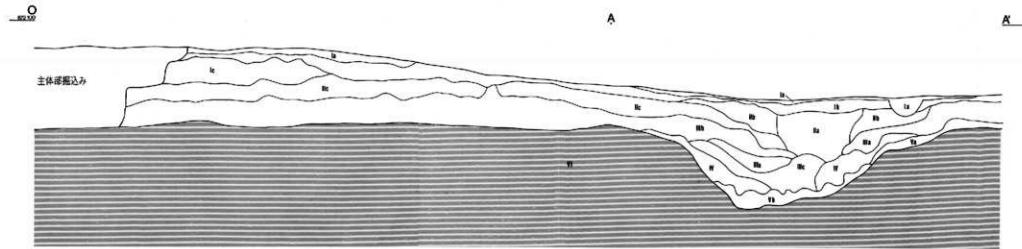


図7 セクション (O-A-A')

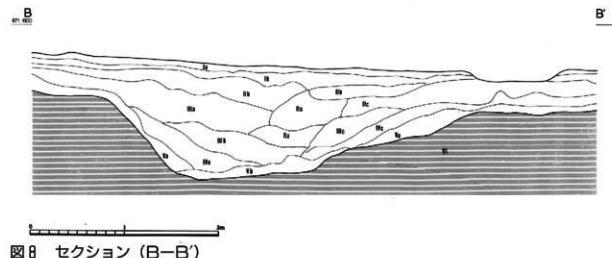


図8 セクション (B-B')

- I a 單褐色土、粒子不均密、しまりなし
- I b I a よりやや明るい褐色土、粒子不均密、しまりなし
- I c 黄褐色土、黄褐色土粒子を多量に含む、粒子不均密、しまりなし
- I d 褐色土、黄褐色土粒子を少額含む、粒子不均密、しまりなし
- I e 黄褐色土、黄褐色土粒子を多量に含む、粒子均密、しまりなし
- II a 黒色土、わずかに黄褐色土粒子を含む、粒子均密、しまりなし
- II b II a よりやや明るい暗褐色土、わずかに黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりなし
- II c 暗褐色土、粒子不均密、ややしまりあり
- III a 暗褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりあり
- III b III a より明るい褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子均密、しまりあり
- III c III a より暗い褐色土、黄褐色土粒子を含む、粒子不均密、しまりあり
- IV a 單褐色土、粒子均密、しまりあり
- V a 黄褐色土、粒子不均密、しまりなし
- V b 黄褐色土、径3~8cmの黄褐色土ブロックを多量に含む、しまりなし
- VI 黄褐色土、粒子均密、しまりあり

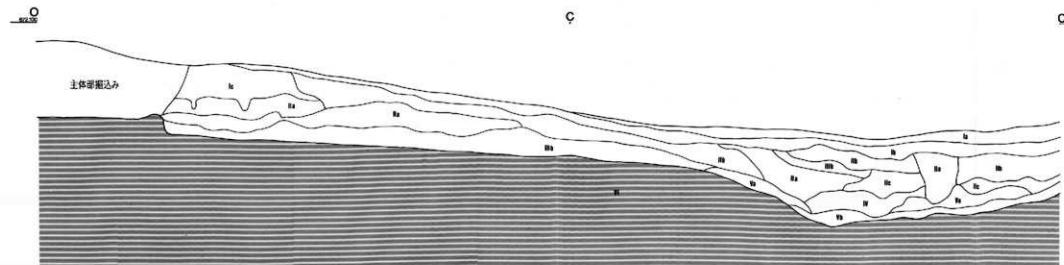


図9 セクション (O-O'-O')

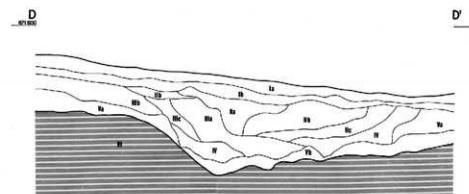


図10 セクション (D-D')

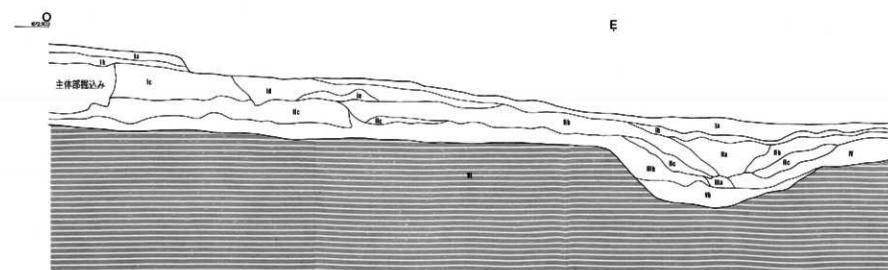


図11 セクション (O-E-E')

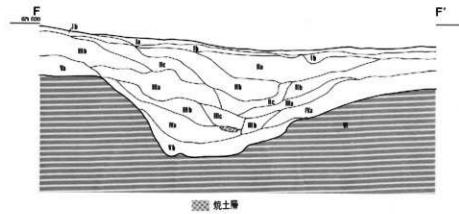


図12 セクション (F-F')

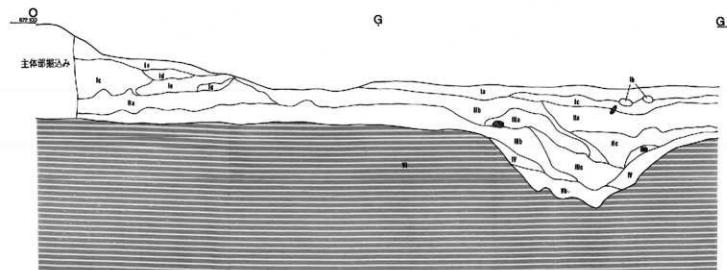


図13 セクション (O-O'-G-G')

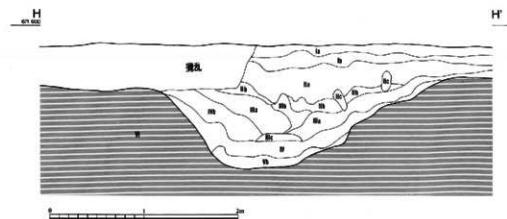


図14 セクション (H-H')

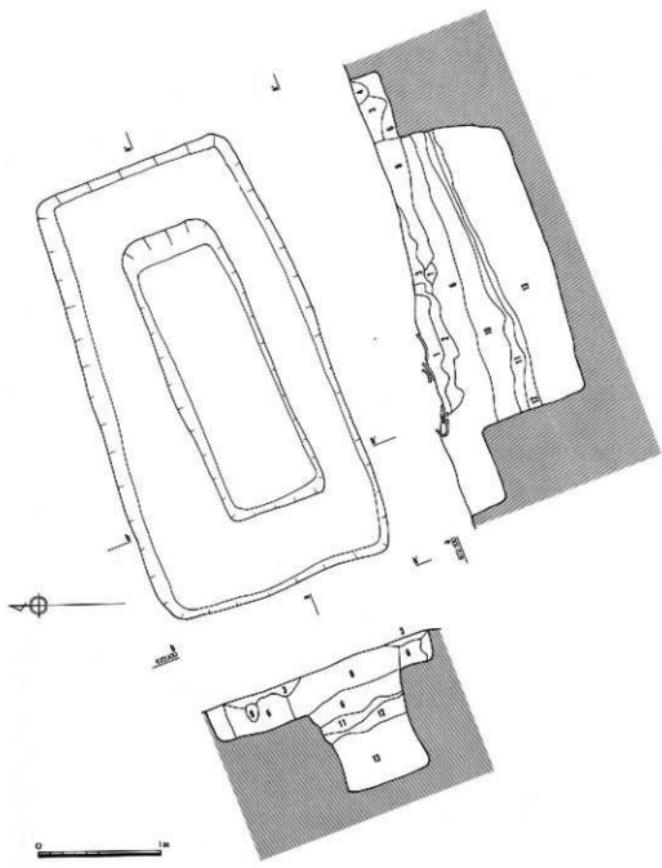


図15 1号方形周溝墓主体部層序

- |   |                                    |    |                                    |
|---|------------------------------------|----|------------------------------------|
| 1 | 暗褐色土、粒子均密、しまりなし、土器出土               | 9  | 黄暗褐色土、黄褐色土ブロック(径1~4cm)を多量に含む、しまりなし |
| 2 | 褐色土、粒子やや均密、しまりなし                   | 10 | 黄暗褐色土、黄暗褐色土ブロック(径0.5~1cm)を含む、しまりあり |
| 3 | 黄褐色土、ブロック(径0.5~1cm)状粒子を多く含む、しまりなし  | 11 | 黄暗褐色土、黄褐色土ブロック(径2~4cm)を多量に含む、しまりあり |
| 4 | 1に同じ                               | 12 | 黄暗褐色土、黄褐色土ブロック(径2~8cm)を多量に含む、しまりあり |
| 5 | 3に同じ                               | 13 | 黄褐色土、粒子均密、しまりあり                    |
| 6 | 黄暗褐色土、黄褐色土ブロック(径1~4cm)を多量に含む、しまりあり |    |                                    |
| 7 | 樹根による擾乱                            |    |                                    |
| 8 | 黄暗褐色土、粒子均密、しまりあり                   |    |                                    |

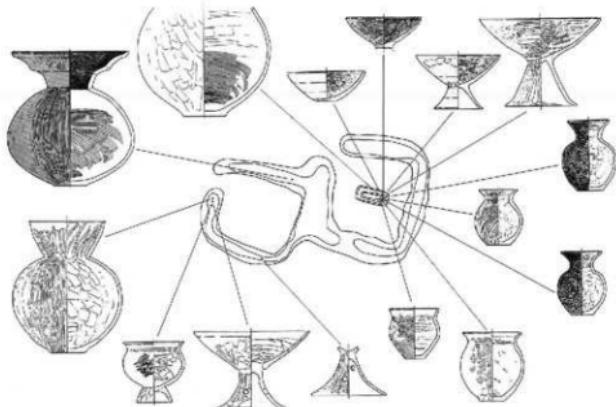


図16 1、2号方形周溝墓主要遺物出土位置

### 第3節 出土遺物 (図17~23)

1号方形周溝墓墳頂部の表土層下から出土した土器類は、埋葬施設と推測される竪穴状施設の直下から出土している。この土器類の性格付けは今後に検討していかなければならないが、最大の特徴は高壺と壺の一部を除きいずれもほぼ完形状態で出土したことであろう。各土器の表面も顕著な磨滅、傷痕が認められない上に、出土レベルはほぼ水平であり、これらが無造作に廃棄されたものとは考えられない。

小型壺（1～3）。いずれも単純口縁で胴部中央に最大径をもち球状の胴部を呈するが1は比較的頸部が短く、頸部から胴部にかけての屈曲が弱いのに対して、2と3は頸部が長く、頸部から胴部にかけての屈曲が強い。底部を除く器体表面と頸部くびれ部から上の内面には赤色塗彩が施されている。

高壺（4～6）。いずれも杯部が内湾しながら上に開き、明確な稜を持たないタイプである。4と5に関しては脚部が外反しながら開いている。脚部内面以外は全面赤色塗彩が施されている。

小型甕（7・8）。いずれも小型で単純口縁であるが、8は口唇部にハケ状工具による刻み目がある。7は胴部に縦方向の粗いハケ目が、肩部から胴部中央にかけて横方向の粗いハケ目が施されている。8は器面全体に比較的細かいハケ目調整が施されている。いずれも赤色塗彩は施されない。

小型鉢（9）。やや内湾ぎみに開く。底部以外全面に赤色塗彩が施される。

壺（10・11）。口縁部が若干内湾しながら長く開き、頸部が強く屈曲するタイプと思われる。10は2号方形周溝墓周溝内出土の壺と接合関係にある。

12～15は2号方形周溝墓の周溝内から出土したものである。

壺（12）。12は有段口縁の壺である。胴部はやや下部に最大径をもつ球形を呈する。

高壺（13・14）。13は高壺の脚部であり、朝顔状に外反する。円孔を6個穿ち、赤色塗彩が施されな

いなど、1号方形周溝墓墳頂部出土の高壺とは異なるタイプといえる。14の高壺は杯部の下端に稜をもち、脚部上端は比較的円柱状に直上する。

小型台付壺（15）台付壺としては小型でつくりもはなはだ粗いものである。口縁部はいわゆるS字状口縁を模して製作しようとした意図がうかがえ、「S字壺」の範疇として把握できよう。

今後に未整理の土器類の検討を加えなければならない部分が大きいが、以上の土器群は甲府盆地地域古墳出現期の編年（中山1986）でいうII期（六科式）からIII期（京原式）に概ね並行するものと考えられる。また韮崎市坂井南遺跡の編年（山下1988）に従えば、坂井南I期からII期に相当する。しかし、1号方形周溝墓墳頂部出土の小型壺は近似例としては中道町上の平遺跡の弥生時代後期後半から古墳時代初頭欠山式並行の小型壺A類（山梨県教育委員会1991）が求められ、さらに2号周溝墓周溝内出土の12の壺や14の高壺はやや新しい段階であり、弥生時代後期後半・古墳時代前期初頭から前期中葉までの時間幅のなかでこれらの土器群を把握しておく必要があろう。また、前記したように1号方形周溝墓墳頂部出土の土器群は赤色塗彩のものが多く、その他出土の土器群とは性格や時間の差を考慮すべき点もある。

中山誠二氏は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器群について、東海東部系と中部高地系の土器群が混在する「A相」と、東海西部系の土器群が主体となる「B相」とに分類し、古墳出現に際してのそれぞれの土器群として表現される集団間の動きに着目している（中山1993）。1号方形周溝墓墳頂部出土の赤色塗彩系を主体とした土器群はこの視点からすれば明らかに「A相」色が強いともいえる一方で、周溝内から出土している土器群に現段階で赤色塗彩された土器は一点も出土していないことを考えあわせると、（個々の土器自体に製作年代の違いがあるとしても）出土状況の異なる両者を単なる時間差の問題として処理するだけでなく、周溝墓の墳頂部に置かれた土器と、周溝内に埋没しやすいところに置かれたあるいは廃棄された土器とが、意図的に選別されていた可能性も考えられる。

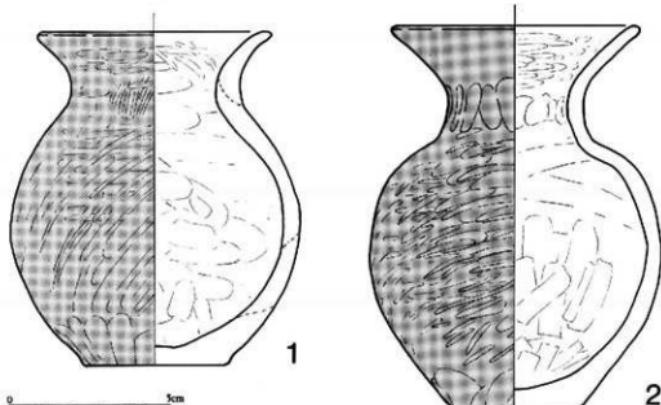
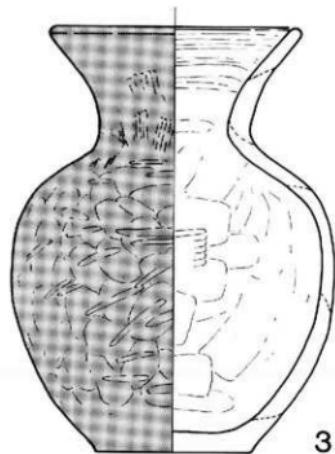
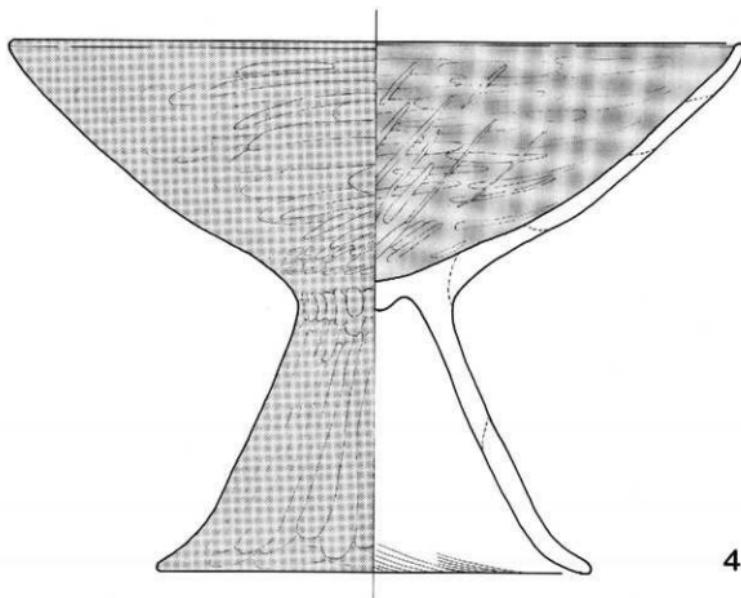


図17 出土遺物（1、2）



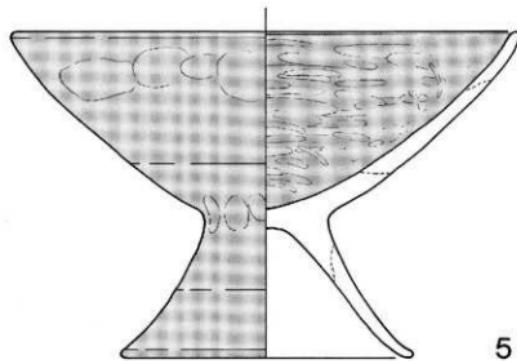
3



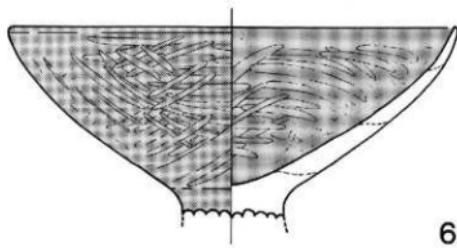
4

図18 出土遺物（3、4）

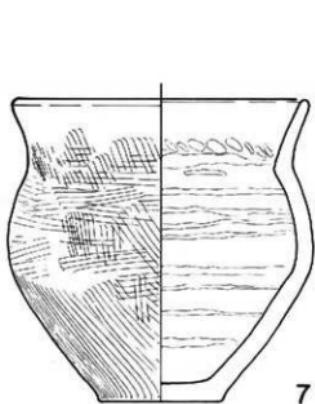




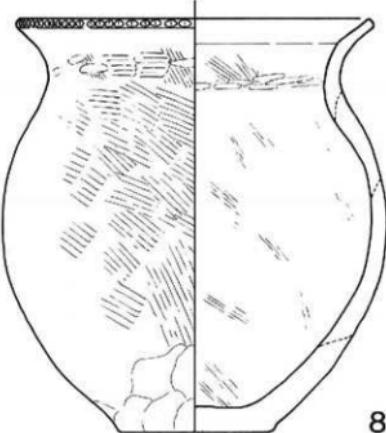
5



6

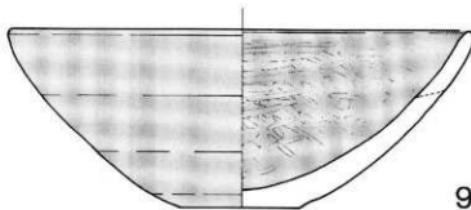


7

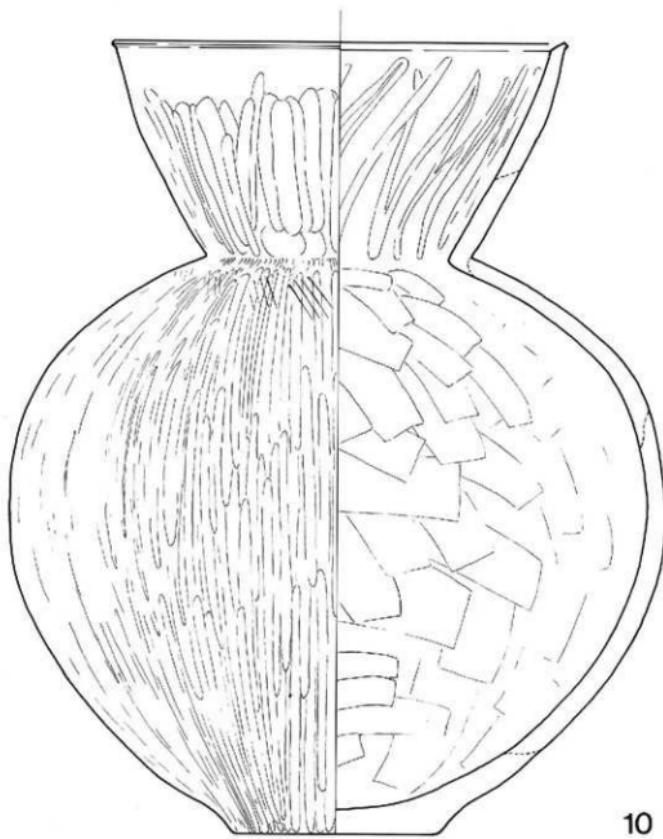


8

図19 出土遺物（5、6、7、8）



9



10

図20 出土遺物（9、10）



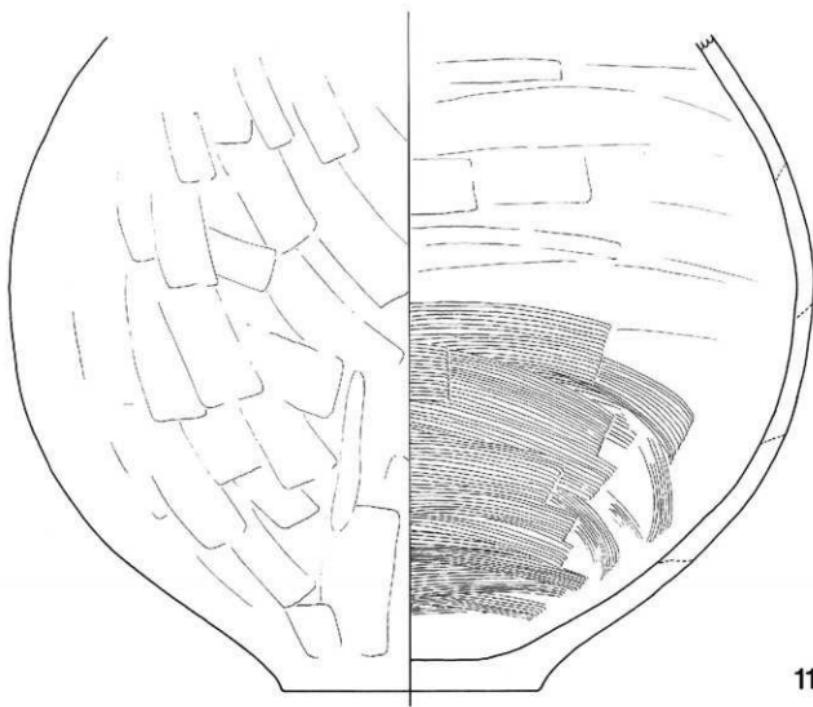


図21 出土遺物 (11)

11

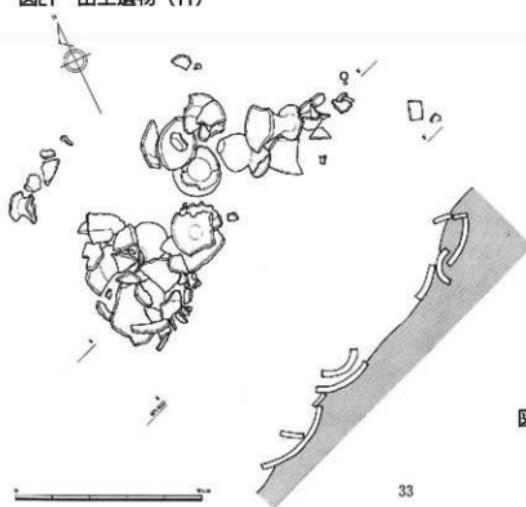
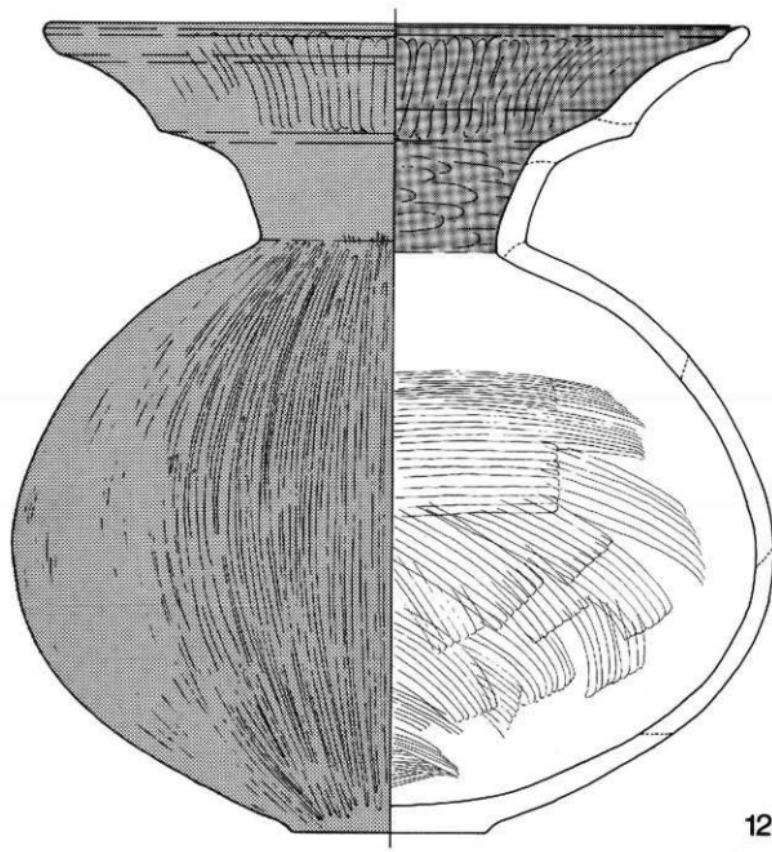
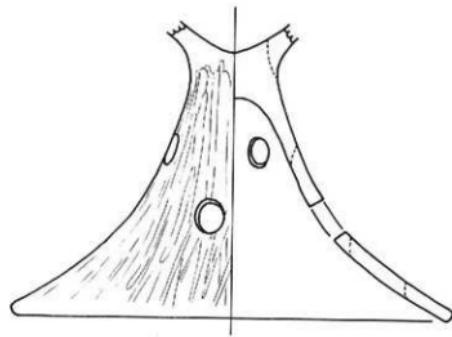


図22 1号方形周溝墓填頂土器  
出土状況

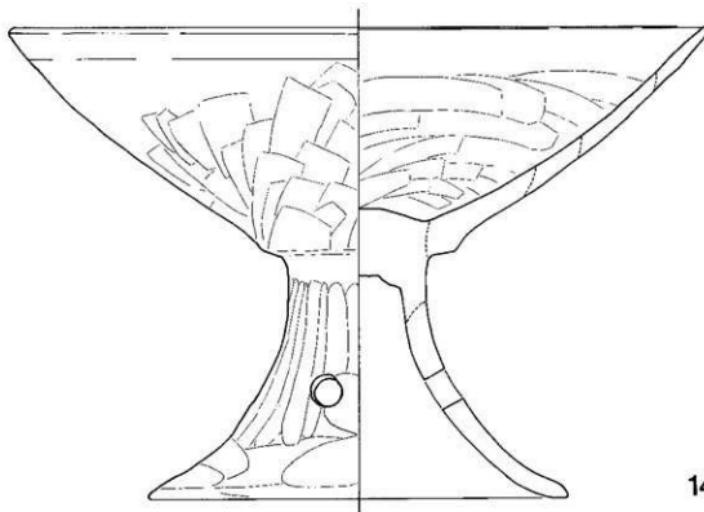


12

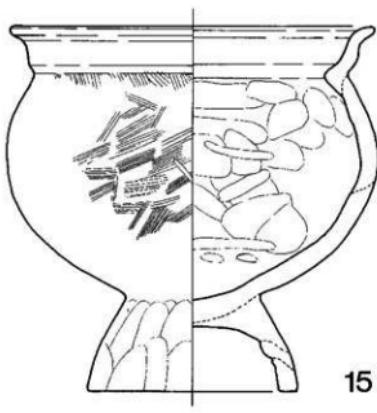


13

図23 出土遺物 (12、13)



14



15



図24 出土遺物 (14、15)

## おわりに

北巨摩地域では庵崎市の坂井南遺跡で12基の方形周溝墓群がすでに確認されているが<sup>1)</sup>、それに次ぐ周溝墓群の発見例となった。とくに弥生時代終末から古墳時代への移行期に際して、単発的な造構、遺物の確認にとどまっていた八ヶ岳南麓地方における本遺跡の考古学的な位置づけは重いものと考える。

今回大まかに報告した2基の方形周溝墓の他に、第1章で述べたとおり他に少なくとも4基の周溝墓の存在が確認されている。他の周溝墓の一つは調査区の最も西側、現在町道が南北に走っている場所に接するところで3号周溝墓と名付けたものである。この3号周溝墓は周溝を部分的に確認したのみで、本格的な調査は次年度に行われる予定だが、北村遺跡のなかでは最も大型の周溝墓と推測される。規模は推定で22~23mほどで、方台部墳丘の規模も1号や2号の方形周溝墓のものよりはるかに大型である。他の3基は3号周溝墓の北側にあり一辺7mほどの小型の周溝墓と思われる（4号・5号・6号周溝墓）。小型のものと大型のものとではおよそ1:3の開きがある。

未調査であるために推測の域を出ないが、北村遺跡の周溝墓には上記のようにいくつかの大きさのタイプが混在していることと、住居跡は全く確認されないので少なくとも調査区地域が墓域としての機能を持っていたことが予想される。このような例は山梨県内では上の平遺跡の方形周溝墓群（山梨県教育委員会1991）にも認められるが、100基以上の方形周溝墓が確認された上の平遺跡が立地する広大で平坦な丘陵台地に比較すると、北村遺跡はいかにも痩せた尾根上に立地していることから、周溝墓群の規模は上の平遺跡よりも限定されたものと思われる。

また、上の平遺跡やそのすぐ北の丘陵上に位置する東山北遺跡も含めた大規模周溝墓群、とりわけ大型の方形周溝墓の出現が、それとほぼ同時期あるいはすぐ後続して同じ丘陵上の端部から沖積面にかけて立地する大丸山古墳などの前期古墳群（東山古墳群）造営の社会背景と大きく関わっていたことが指摘されている（山梨県教育委員会1993）。北村遺跡周辺の北巨摩地方には大型の前期古墳は今のところ一例も確認されておらずこのことをごく単純に評価するならば、古墳時代前期という国家形成期に、北村遺跡の周溝墓群を造った地域集団と上の平や東山北遺跡の大規模周溝墓群を造った集団とがそれぞれ経験した社会情勢の推移には何らかの相違があったものと予測され、北巨摩地方の歴史的性質を考える上で看過できない部分であろう。

今後はさらに、周溝墓群の範囲や周溝墓群と同時期の集落存在の可能性なども視野にいれながら調査に望んでいきたい。

註

1) 莢崎市教育委員会 山下孝司氏の御教示による。

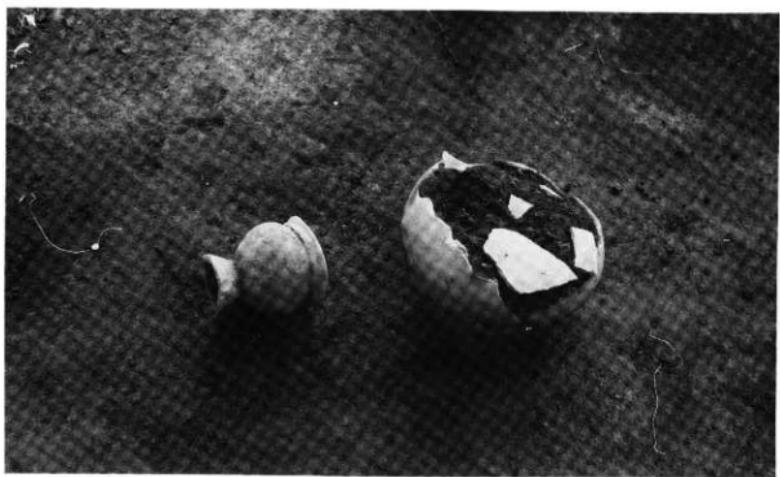
## 写真図版



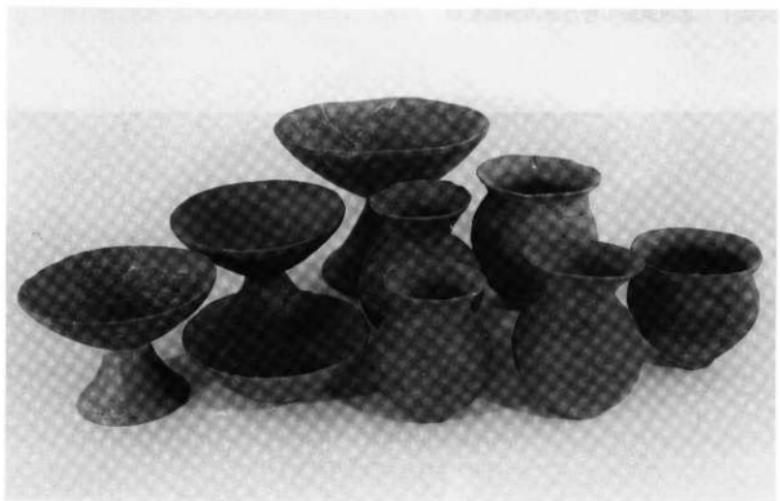
図版1 北村遺跡1号方形周溝墓全景



図版2 1号方形周溝墓填顶部遺物出土状況



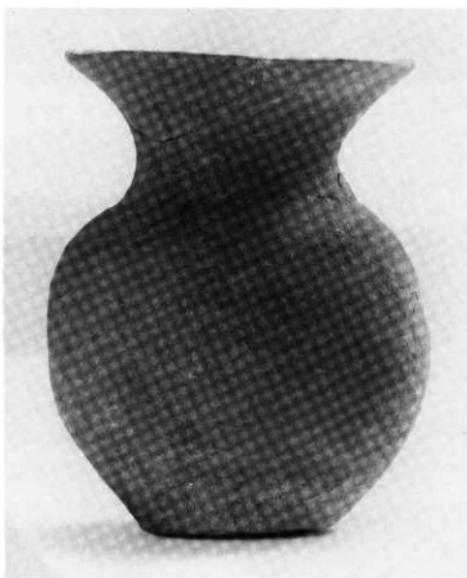
图版3 2号方形周溝墓遺物出土状况（周溝内）



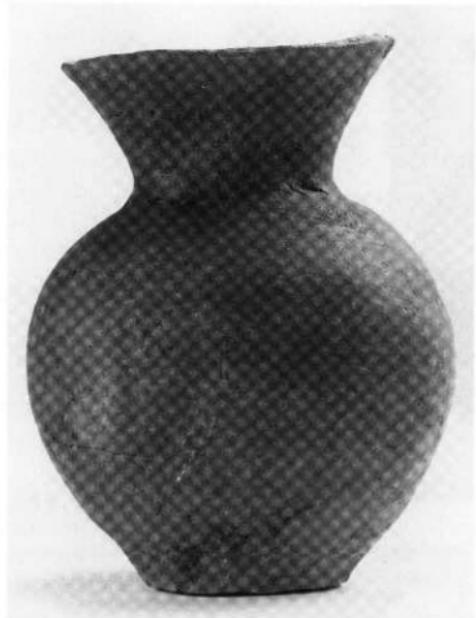
图版4 1号方形周溝墓墳頂部出土土器



図版5 出土遺物1



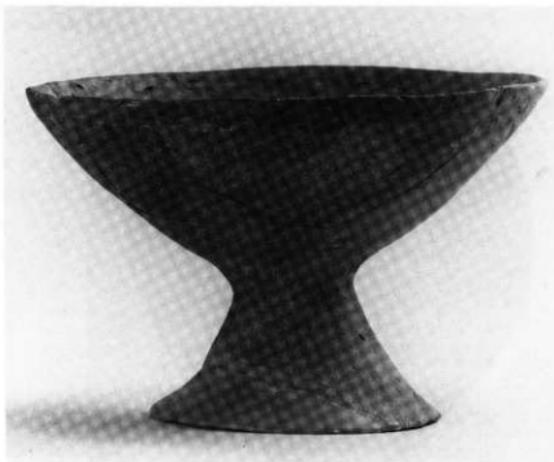
図版6 出土遺物2



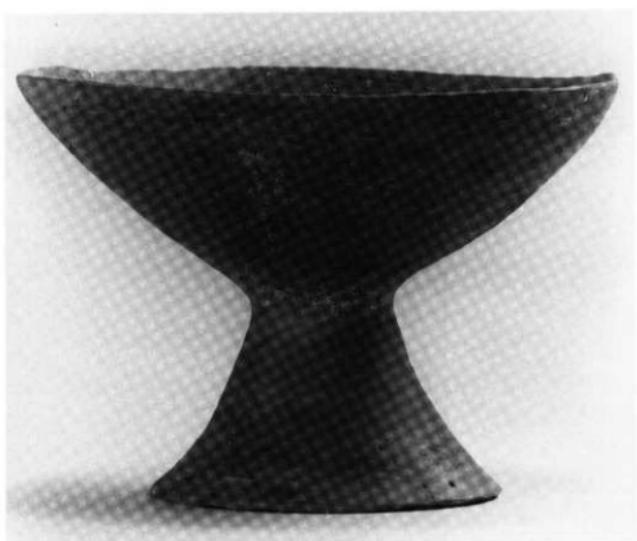
図版 7 出土遺物 3



図版 8 出土遺物 4



圖版9 出土遺物5



圖版10 出土遺物6



図版11 出土遺物 7



図版12 出土遺物 8



図版13 出土遺物9



図版14 出土遺物10

#### 参考文献

- 1) 大山柏・竹下次作・井出佐重1941「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」「史前学雑誌」13—3 1—29頁 史前学会
- 2) 山梨県教育委員会1991「上の平遺跡」
- 3) 山梨県教育委員会1993「東山北遺跡」
- 4) 中山誠二1986「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」「山梨考古学論集」1
- 5) 中山誠二1993「甲斐弥生土器編年」の現状と課題」「研究紀要9」86—136頁 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター 205—237頁 山梨県考古学協会
- 6) 山下孝司1988「古墳時代前期の土器編年」「坂井南」149—175頁 茎崎市教育委員会

## 報告書概要

書名	三井氏館跡（北村遺跡）概報			
シリーズ	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集			
著者名	小宮山 隆			
編集・発行者	長坂町教育委員会			
住所・電話	山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19 Tel0551-32-2111			
印刷刷所	(株) ぎょうせい			
印刷日・発行日	1995年3月20日・1995年3月31日			
三井氏館跡（北村遺跡）	25000分の1地図名・位置・標高	長坂上条	北緯 35°51'97" 東経 138°22'53"	671m
概要	主な時代	古墳時代前期		
	主な遺構	古墳時代前期の方形周溝墓		
	調査期間	1994年10月1日～1995年1月14日（1次調査）		
	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町長坂下条字北村		

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集

**三井氏館跡（北村遺跡）概報**

1995年3月20日 印刷

1995年3月31日 発行

編集・発行 長坂町教育委員会・岐北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19

Tel 0551-32-2111

印刷所 ぎょうせい

